

ご隠居・伊能忠敬

第6回

郷土史研究会会員

二子石 三喜男

(草部出身 熊本市在住)

伊能忠敬の主な経歴

- 1745年（延享2）上総国小関村（現在の千葉県山武市九十九里町）に誕生。幼名三治郎
- 1751年（宝暦元）母ミネ死去 養子の父は三治郎の兄と姉を連れて実家神保家に戻る
- 1755年（宝暦5）三治郎父の実家に引き取られる
- 1762年（宝暦12）17歳の時佐原の酒造家で地主の伊能家ミチに婿入りし忠敬と改名
- 1781年（天明元）佐原村本宿組名主となる
- 1783年（天明3）浅間山大噴火、利根川洪水、凶作。堤防の修築に尽力。妻ミチ死去。
領主津田氏より名字帯刀を許される
- 1786年（天明6）この年と翌年にかけて関東・東北地方大洪水、飢饉。
貯蔵の米で窮民を救う
- 1790年（寛政2）仙台藩医・桑原氏の娘ノブを3人目の妻に迎える
- 1791年（寛政3）家業の実務を長男景敬に任せる
- 1794年（寛政6）49歳の時隠居が認められ家督を長男景敬に譲る。名を勘解由と改める。
- 1795年（寛政7）江戸に出て幕府の天文方高橋至時の弟子となる
- 1800年（寛政12）閏4月、自ら諸費用の大部分を負担しこれ以後10次にわたる測量の第1歩をスタート
- 1812年（文化9）第8次測量の時草部村・早稲村、竹原村（現在の山都町）・高森町・色見村を含む九州の内陸部と屋久島・種子島・壱岐対馬などを3年にわたり測量
- 1818年（文政元）73歳で死去。浅草源空寺の恩師高橋至時の墓のそばに埋葬される。
戒名 有功院成裕種徳居士
忠敬が亡くなって3年後に、忠敬の弟子達の手で大日本沿海輿地全図が完成し幕府に納められた。しかし、この間は地図が忠敬の手で完成したことにするため、忠敬の死は伏せられていた。
(これより192年後の) 2010年（平成22）文化庁は忠敬の偉業を認め、忠敬が作製した地図を含む関連の資料などを国宝に指定した。

忠敬の業績と人物像

これまで5回にわたり伊能忠敬の高森測量の足跡などについてお伝えしましたが、今回から忠敬の子供の頃のことや17歳で伊能家に養子に入り身につけた才覚で家業を飛躍的に発展させたこと、忠敬が49歳で隠居したあと測量実施に伴う多額の諸費用を自己負担してまでなぜ始めたのか、そして、病気がちな体を押してこの大偉業を成し遂げさせた原動力は何だったのか？など、様々な関係資料等から忠敬という人物について上記の主な経歴に沿って考察し、「ご隠居・伊能忠敬」についてのまとめにしたいと思います。

忠敬は1745年（延享2）上総国小関村（現在の九十九里浜の中央付近）の小関家に誕生。三治郎と名付けられたが、6歳の時母ミネが亡くなり養子だった父は三治郎の兄と姉を連れて離縁された。小関家に残された三治郎は10歳の時父の実家神保に引き取られ、縁戚の平山家で漢学や儒学の手習いを受けながら父のもとで過ごす。三治郎17歳の時、佐原の酒造家伊能家では10年以上も当主が不在のため婿を求めており、世話になっている平山家から伊能家へ養子に入ることを勧められる。恩師からの勧めでもあり、次男でもあったことから三治郎はこれを承諾。名前も忠敬と改め伊能家の入婿となった。利根川沿いの佐原にある伊能家は酒造業を営むほか、利根川を利用した運送業や米穀の売買業と金融業も営み、さらに、毎年600石（1,500俵）もの小作米の収穫がある大地主でもあった。これらの家業を受け継いだ忠敬は、商才に長け係数に明るい人達に幼い頃から囲まれて生長したこともあって、めきめきと頭角を現し家業繁栄に奮闘する一方、若くして村名主や村方後見役などを務め、度重なる水害や飢饉が出来るたびに田畑の復旧工事や、貯蔵していた米を安く村人に提供して村の救済にあたるなど地域の発展と繁栄にも多大な貢献を果たした。水害で荒れた田畑の復旧工事には測量の知識や技術が必要なことから、数学、測量、天文などについて独学で知識を高めていったと伝わっている。

次号につづく